

第 4 曲；発動！

1)

展開されたバリアーのおかげで、直接のダメージは喰らわなくなったものの、羊の速さは、依然として凄まじく、辛うじて、よけられるくらいだ。初戦にしては、唱太は、よくやっているといえた。亜音速の羊の迫弾砲の、矢継ぎ早の威力は、首都の方にできたという645メートルのスカイタワーですらも、一瞬で倒壊させ、砂塵に変えてしまうほどの威力があった。ナノ秒発で、その恐るべき体当たりが、一匹ごとに繰り出されるのだ。

それでいて、全く、敵は、反動のダメージを受けないのは、恐らくは、大樹に連繫している、バネのようなしっぽじみた蔓のせいだろう。

とにかく、残像も見えない動きを止めなくては、どうにもならない、

「マスター、次の曲を…」

「いや、それよりも、そろそろ、防御がやばいんだけど、今、いくつ、歌が歌えるんだ？」

考えるだけでいいとはいえ、手詰まりに近い状況なのは変わりがなかった。

「治癒系と、防御系。異空間展開をする始動キー。この3つですね …。」

「現状に適した、歌は？」

「防御系、異空間展開の2つですが、思考トレースが、マニュアルモードになっています。デバイスによる直接入力となると、一番 弱い歌しか使えません。」

「一番弱い歌？」

意味が分からなかった。

唱太の表情で理解したのか、思考トレースの結果なのか、ミクが補足する。

「あ…、説明しますね？」

「手短に頼む。」

「わかりました。では…。」

ミクの説明によると、彼女の歌、通称、神曲は、その効果によって、十の階級に分類されるらしい。唱太の手にしたコントロールデバイスのモニターに、詳細が羅列されていく。

「

第10位 天堂奏楽(カテドラル・ノート) …神曲の起動キーとなる神曲。

第09位 医神奏楽(ラファエル・ノート) …治癒系の神曲。

第08位 権天使奏楽(アウフィエル・ノート) …防御系の神曲。

第07位 能天使奏楽(カシエル・ノート) …時空移動、天候操作の神曲。

第06位 力天使奏楽(デュナミス・ノート) …多彩な効果の神曲。

第05位 主天使奏楽(ドミニオン・ノート) …精神に作用する神曲。

第04位 座天使奏楽(トロン・ノート) …運命の輪を掌る神曲。

第03位 智天使奏楽(ケルブ・ノート) …夢を掌る神曲。

第02位 熾天使奏楽(セラフ・ノート) …七大天使の力を引き出す神曲。

第01位 至神奏楽(ゼニス・ノート) …

最後の審判の統括者の力を得る神曲。

」

唱太は、ふむと言、呟いた。要するに、一番弱い歌とは、第十位の神曲のことを指すらしい。

「今は、第十位、天堂奏楽(カテドラル・ノート)の、治癒の結界を展開する状態、フェイズ5の段階から、バトルフィールドを展開する状態、フェイズ7に移行、そこから、防御結界を展開するフェイズ6へと上昇、その状態を継続中です。」

フェイズ1からフェイズ7までである、第十位、天堂奏楽(カテドラル・ノート)は、ミクの経験値と、エーテル残量により、大きく、変動する。

また、神曲(トリシアギオン)も、フレーズの長さによって、効果の威力に、強弱をつけるのだそう。無論、フルコーラスのほうが、神曲の効果を、百パーセント以上引き出せるが、今のミクに、その力は無かった。

唱太は、考えた挙句、意を決したように、ミクに告げる。

「オートにしてくれ。」

ミクは、先だっの気持ちの乱れを考慮し、少し顔を曇らせながら、躊躇したように、硬い表情の唱太を見やる。

「しかし…」

「大丈夫だ。上手くやってみせるさ。」

「わかりました。」

ミクは、思考トレースを、デフォルトのオートモードに戻すと、

「思考トレース、オートに入りました。

フェイズ6、ディフェンシブ・ノートを展開します！」

ぶうんと音がして、ミクと唱太を護るようにドーム状に広がる緑の光のカーテンが展開する。

2)

羊がぶつかって、泣き声が聞こえる。
ばきいんっ！と当ったところから、
緑色の火花が散る。次は、動きだが…。

「んめええっ！」

「動きをとめるぞ！」

ばきいんっ！

「 んめええっ！ 」

「 どうやって？ 」

ばきいんっ！！

「 んめええっ！ 」

「 そうだな、相手は植物だし… 」

ばきいんっ！！！！

「 んめええっ！ 」

ミクと唱太はどうしようかと考える。

防御結界の火花が、雪のように舞って
まずいことになってきている。

雪のようだなと思って、はっとひらめく。

3)

ミクは、そんな唱太の思考を読み取って宣言する。

「 わかりました。なるほど、冬ですか。 」

「 できるかい？ 」

唱太は、ミクに、心配そうに尋ねてみる。

「 そのためには、フェイズ3に移行する必要があります。 」

「 フェイズ3か…。 」

つまりは、後、三段階も、レベルを引き上げる必要性があるわけだ。

4)

「め…、んめ…。」

厭きることなく、
なお攻撃をやめようとしないスキタイの羊に、
止めをさすべく、唱太は叫ぶ。

今なら、一番 弱い歌でもいけそうだ。

「よし、動きが止まった！ミク、思考トレースを…。」

ミクは、唱太に頷き返した。唱太も肯首して了解をとる。

「マニュアルに…」

唱太は、ミクのコントローラー・エレキを構えて、

ごく慣れた調子で伴奏をはじめると、

「俺の得意な曲で、とどめだ！」

ミクのヘッドセットのLEDが点滅して、フェイズ4への準備段階。
入力コードが、オールグリーンになる。

「デバイスによる入力を確認。サンプリングを行います。」

1秒にも満たないうちに、ミクは、次の処理に移る。

「サンプリング終了。補正、および、トランスポーズ完了しました。
フェイズ4に移行。ノイズを、結界に捕捉します。」

ミクの発言と共に、スキタイの羊は、ミクが、スキタイも羊に向かって、ドラマティック・ソプラノの歌を、歌うと、羊の生る大樹を取り囲むように、光彩陸離な緑色の光の柱が、天から垂直に降り注いで、地上にまで、到達する。

「 天堂奏楽(カテドラルノート)システム、フェイズ4。
マニュアルモード作動します。」

必殺技の準備が完了したことを示す、
ヘッドセットのLED が、オールグリーンの
状態から、オールイエローにかわり、フェイズ3へと移行する。

「 第九位から、第七位までの神曲が、使用可能。
エーテル残量チェック。カウント始めます。」

2分45秒のカウントダウンが始まり、
左の二の腕に、01 の紅いタトゥーが、浮かび上がった。

唱太とミクを護っていた緑色のオーラが、スポットライトのように、
収束して、ミクは息を吸い込むように、オーラを吸収し、目を閉じて、
精神を集中させると、神曲を宣言する。

「 第七階位。能天使奏楽(カシエル・ノート)。
クファシエル・ノート・フィルムルヴェド。」

青い光で編まれた五線譜が、唱太がさっきまで歌っていた自慢の歌を、
速やかに、術者のミクを取り囲む様に、サークル状に記譜していくと、
彼女のドラマティック・ソプラノで奏でる歌が、スキタイの羊の周囲に、
天から降り注いでいた、緑色の光の柱の結界内に響き渡る。

自分が歌うよりも数段上にある歌唱力に、唱太は、圧倒されながらも、なお
も、手慣れたしぐさで演奏を続ける。

「 いけえええええええええっ！ 」

サビを歌った、そのとき、

無原罪の素体から繰り出される、不可避の超音速のエーテル波の歌声は、

気圧と気温が、極限まで下がり続けていく結界の中で、外気温との差から、ダウンバーストと、絶対零度のブリザードの竜巻が、続けざまに三回、渦を巻き、氷結した羊の大樹による脆いオブジェが、ダイヤモンドダストの奥に、一瞬だけ垣間見えると、冷氣と浄化の干渉を受けたノイズは、具現化する力を、根こそぎ失った。三度目のダウンバーストの中で、スキタイの羊は、粉雪のように砕け、目映い虹色の光の断絶魔をあげて、具現化する力を失い、吹雪に溶け込むように、完全に消滅していった。

これぞ、ミクの指定したポイントの、天候を操る第七階位の神曲で、能天使奏楽(カシエル・ノート)の一つ。フィルムルヴェドである。

そして、完全無欠に浄化された駅前広場に、残ったのは、仔猫と、寝ぼけ眼で首を振る野次馬たちと酔っ払いだった。

4)

「終わったか。あっけない。」

と、唱太は、実は内心、へたりそうなほど、安堵していたのだが、ミクの手前、強がってみせる。

ミクは、疲れた声で、先ほどの癒しの歌で、復活した仔猫を頭の上にのせて答えた。

「そうですね。」

「にゃ〜お ♪」

唐突に、彼女はフラフラして、ぱたんと倒れた。

「と、ミク！大丈夫か？」

「だ、大丈夫です…。マスター。」

どうも、ハイバネーションモードに入ったようだ。
幸せそうな顔をして寝ているミクに、

よく頑張ったなと頭を撫でてやる。

さてと、と一息ついた唱太の目に、駅前広場に散乱している金色の綿毛を映りだすと、唱太の瞳の輝きが、金銭欲の方向に、当社比較の百倍増しに輝きを増してくる。

「ミクは、大金になると言っていたな。」

唱太は、ベンチにミクを横たえて、綿毛の回収に向かうのだった。

《つづく》